
流星の起動

檜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流星の起動

【Nコード】

N4699BA

【作者名】

檜

【あらすじ】

時は二二〇X年。――高度に発達した電波技術により、人類は栄華を極めていた。そんな折、「きずな」と称した宇宙ステーションが打ち上げられる。それは、「ブラザーバンド」と呼ばれるシグナルを別惑星に送るはずのものだった。しかし、結果は「きずな」大破。クルー総員行方不明というものに終わる。――これは、その事件によって運命を起動させられた、星河スバルとウォーロックの物語である。／流星のロックマン1の大幅リメイク作品。後々に流星3以降を描く『流星の軌道』や、1以前のスバルを描く『流星の

胎動』に繋がっていきます。原作の『ifストーリー』です。

0..流星の胎動

漆黒という神秘のスープの中で、無数の星たちが輝輝と光を放っている。あまりに遠方であるが故に光点にしか見えないが、実の所は想像すら追いつけないほどの巨大なスケールを持っているのだ。それらが、無数にあちこちに点在している。宇宙そのものがスープだとするならば、輝く星々は散りばめられた具だ。

そして、緑色に輝く巨大な火の球の近くには、金属核の高速回転によって強力な磁場を誇る惑星が、二つあった。その内の一つが地球の持つ月と同じような衛星を伴っており、惑星の重力が強いことを示唆している。

衛星がある側の惑星の名は、FM星。

衛星が無い側の惑星の名は、AM星。

双方共に異常なほど強力な磁場を持つ惑星だった。

しかし、その周波数には明らかな違いがある。

FM星の磁場の中に、雑念とも言えるような無駄な周波数が幾つも混じっているのに対し、AM星は極端に無駄が少ない。——簡単に言ってしまうえば、惑星の保有する磁場のみで、生命反応が感じられないのだ。

原因は、数年前にあった。

FM星とAM星の間で戦争が起きたのだ。FM星が一方的に攻め込んだ電撃戦だった。アンドロメダと呼ばれる電波そのものを吸収／破壊する兵器により、AM星の電波生命体はあっという間に駆逐された。

虐殺、と形容してもまだ足りないほどの一方的攻戦だった。

そして。

地球暦二二〇X年、現在。

同じような種類の悲劇の引き金が、絞られようとしていた。

F M星とA M星に適度な電磁波を齎し、結果として惑星の磁場との相互干渉で電波生命体が生まれることとなった、緑色の輝きを放つ恒星。緑色の太陽の輝きを反射する、白銀の十字架が漆黒のスープの中で遊泳していた。

N A X A、と青く刻まれたロゴが緑色の光に染め上げられる。しかし、今日この時に限って。宇宙は漆黒さの中に神秘を覆い隠し、その墨よりも圧倒的な黒さに見合う残虐性を代わりに見せ付けていた。

白銀の十字架——宇宙ステーション「きずな」の装甲が悲鳴を上げる。電磁波にやられて回路がショートし、細長い線がいくつも千切れて電撃の悲鳴を上げた。外に解放された電線が叫び声をあげながら、暴れ狂う。中ではよほどの電磁波が暴れ狂っていると思えた。もしも、われわれ人類の肉眼で電波を視認することが出来たのならば。

今この光景に、瞠目していたことだろう。

「ウォーロック……」

『礼は、いらねえよ……グ、ガハッ……！』

青白く、ぼんやりとした光に覆われた人間の者たちが、宇宙服もまともに着用せずに漆黒の中に浮かんでいたのだ。既に「きずな」は濛々たる黒煙によって煙霞に包まれ、視認は難しくなっている。爆裂音に続いて煙焰が立ち込め、「きずな」の寿命はもう短いだろうと予期させる。

幽霊のような姿に成り果てた、人類屈指の精鋭たちに向き合うのは、獣の顔や胸部を象った、深海を思わせるような色合いの金属装甲から不定形の緑色の光を噴出させるF M星人だ。

しかし、猛々しかったはずの光は、今やノイズ混じりで噴出も弱

弱い。金属装甲も大量の傷が開いており、そこから緑色の電波情報
報が漏れ出している始末だ。

「だが……」

『オメエらは、さっさと行け……。それと、ダイゴ……てめーの息
子は、オレが面倒見てやつからな……。覚悟、しやがれよ……。』

大吾、と呼ばれた無精鬚の男は精悍な目つきをウォーロックに返
し、迷いを振り切る。

「ああ。分かった。頼んだぞ！」

『おう、よ……。まか、せとけ……。』

ウォーロックは弱々しく両腕を「きずな」クルーたちに翳した。
そうして、彼らの周波数と自分の周波数を同調させていく。難しい
ことではなかった。彼らクルーの肉体の質量を電波へと変換し、電
波体とさせたのはウォーロック自身だったのだから。

残り少ない体力を絞り、ウォーロックはきずなクルーの周波数を
格段に引き上げた。

『じゃあ、な……。アバヨ！』

きずなクルーの幽霊のような半透明な体が、次々と消えていく。
高度な周波数技術で、宇宙の方々に飛ばしてしまったのだろう。ど
こに辿り着くかは、ウォーロックにも分からなかった。しかし……。
彼らならば、必ず生き残り、英雄として故郷たる青い惑星に帰還す
るであろう。ウォーロックは謎めいた確信を感じながら、爪と牙を
尖らせる。

『オレは、戦いの獣……。ウォーロックだ！！ ナメてんじゃねえぞ』

！ うおおおおおおおおおッ！！』

間拔けなキャンサーとは違い、彼は敵前逃走を良しとしない性質だった。馬鹿正直に、遠く離れた「きずな」からコチラへ向かって来ようとする夥^{おびただ}しい数の軍艦やFM星人たちに立ち向かっていく。直接出向いてきたFM王ケフェウスが緑色の剣を握り込み、仲間たちよりも真^と先にウォーロックへと駆け出した。二人は光の筋を作り、疾^とう疾^とうと真空を駆ける。

ケフェウスは、ウォーロックときずなクルーの見せた友情劇に堪らなく苛立っていた。ウォーロックを殺そうと息巻くジェミニたちを制止し、わざわざ自分から戦士を仕留めようとしたのは、絆などこの宇宙の漆黒さのように冷たい物だという、己の哲学があったからだ。

『ビーストスイングウー！！』

『アテニックスイング！』

幼き王は剣に懐疑心を織り交ぜ、戦いの獣は闘争心を込めて互いの攻撃を炸裂させる。

漆黒の中で無数の光が炸裂する。

その余波が流星のようになり、辺りへ光を降り注いだ。そして、彼らは知らない。宇宙全土に知れ渡るほどの、流星の英雄が後々に生まれることを。この争いは、それに向けての胎動だということを。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4699ba/>

流星の起動

2012年1月12日22時02分発行